

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレーシアの客家人と客家語

大嶋広美 (広島大学大学院人間社会科学研究科准教授)

マレーシアの華人社会は、広府系、四邑・五邑系、福州系、興化系、福建系、客家系、潮州系、海南系、三江系など、多様なルーツを持つ人々で構成されている。マレーシア華人の五大方言は福建語(閩南語)、広東語(粵語)、客家語、潮州語、海南語とされているが、実際は、福建語、広東語、客家語の3つの方言が特に広く話されている。

中国大陸における客家人の主な居住地域は、広東省東北部(梅州市)、福建省西部、江西省南部の3省にまたがる境界地域である。マレーシアに移住した客家人の多くは広東省出身で、広東省東北部および同東北部に隣接する揭西県、広東省中部の惠州市と河源市の出身者が多い。客家人の祖先は中国北方の中原地域から南へ移住したとされ、「客家」という名称も、先住者(主)に対して後から移住してきた人々(客)を意味するとされている(他説も存在する)。客家語は中国南方方言の1つであり、発音、文法、語彙(ごい)の面で、広東語、福建語、贛(カン)語(主に江西省の北部・中部で使われている方言)と共通点や類似点がみられる。

マレーシアの客家人の人口は、マレーシア客家協会連合会(華語では「馬來西亞客家公會聯合會」)の推計によれば、約180万人に上る。特に客家人が多い地域として、東マレーシアのサバ州が挙げられる。サバ州では客家語が華人の共通語となっており、華人と先住民の混血であるシノ(Sino)の人々の中にも、流ちょうに客家語を話す者が多い。他に、マレー半島部や東マレーシア・サラワク州にも客家語が多用される地域がある。例えば、首都圏スランゴール州スリクンバガン、ヌグリスンピラン州マンティンやティティ、ジョホール州クライ、サラワク州シニアワンなどが挙げられる。

筆者が接してきたマレーシアの客家人の多くは、他の華人と同様に多言語を話す能力を持っている。彼らは英語、マレー語、華語も話せるため、少なくとも4言語を操ることができる。さらに、マレー半島部の都市部(特に首都クアラルンプール)では、華人の間で広東語も共通語のように用いられるため、5~6言語を流ちょうに話す人もいる。華人同士の会話やオンラインチャットにおいては、2~3種類の言語が混在することも珍しくない。

しかし、筆者が2023年にサバ州で行った客家語の調査では、20代の若者の中に基礎的な単語すら英語や華語で表現する場面が見られた。従来、華人社会では、家庭内や華人の地域社会での交流を通じてまず方言を習得し、その後学校で華語、マレー語、英語を学ぶのが一般的であった。これに対して近年、実用性の観

点からか、家庭内や地域社会でも華語を用いる傾向が強まり、各方言の話者数は減少しつつある。

こうした状況の中、サバ州コタキナバルにあるサバ州・ラブアン連邦直轄区客家協会連合会(華語では「沙巴暨納閩聯邦直轄区客家公會聯合會」、略称「沙巴客聯會」)は、10代の若者を対象に客家語で物語を語るコンテストや客家語の歌の会を開催するなど、積極的に客家語の振興に取り組んでいる。また、同連合会には客家に関する展示室が併設されており、サバ州の客家人の歴史を紹介するパネルのほか、かつて使用されていた農具、生活用具、商売道具、各会館の会誌などが収蔵・展示されている。



サバ州・ラブアン連邦直轄区客家協会連合会の展示室で紹介されていた客家語の単語クイズ(筆者提供)

興味深い点として、その展示室には客家語の単語クイズも展示されていた(写真)。ちなみに「春」は「卵」、「心舅」は「息子の妻(嫁)」、「火蛇」は「稻妻」、「鴨公声」は「声がれ」を意味する。これらの単語には客家語特有の表現や方言漢字が含まれていることから、方言学習のためというよりも、方言への関心を喚起することを目的とした展示物と考えられる。言語の継承には、地域社会や家庭内での使用が不可欠であり、今後その維持や発展に向けたさらなる取り組みが期待される。

< 筆者紹介 >

東京都出身。広島大学大学院人間社会科学研究科准教授。中国中山大学大学院中国語文学系(漢語文学専攻)博士後期課程修了。文学博士。専門は言語学、中国語学(音韻・音声・方言)。主に音韻・音声(特に客家方言、贛方言、中国少数民族のショ一族のショー話)、社会言語学を研究している。